

## 武田泰淳論

——僧侶から創造者としての作家へ——

長 田 真 紀

敗戦、それは日本という国が、焼跡の廢墟と化した時であつた。しかし、同時に、ある新しいものが現れ始める時でもあつた。

文学の世界では、

- ① 政治からの自由
- ② 党派性からの自由
- ③ 私小説の伝統からの脱却
- ④ コスモポリタン世界性への志向

といった特徴をもつ戦後派作家たちが、ぞくぞくと登場してくる。具体的には、野間宏、梅崎春生、中村真一郎、椎名麟三、埴谷雄高、武田泰淳、堀田善衛、大岡昇平、三島由紀夫、安部公房、島尾敏雄らである。

彼らは、いわば文学において新しい世界を創造しようとしたものたちであった。

本稿では、その戦後派作家の一人である武田泰淳をとりあげ、作家への階梯について、とりわけ僧侶であったことについて考察してみたい。

武田泰淳は、明治四十五年二月十二日、東京・本郷にある潮泉寺という浄土宗の寺の三男として生まれている。父親の大島泰信は、愛知の貧農の次男として生まれ、東京帝国大学で姉崎正治について宗教学を学び、大正大学で宗教学の教授を勤め、『仏教読本』や『浄土宗全書』第二十巻に収載された「浄土宗史」の著作を残している学者である。一方、武田の母親つる（戸籍名は「もぎ」であることを確認している）は、後に述べる、渡邊海旭の妹である。武田の兄弟は、兄の大島泰雄（東京大学の水産学の教授を勤めた）、妹のマユリがいた。年譜などで、武田は一般には次男とされているが、じつは、長男泰雄と武田の間に信也という、早世した男児があったことが、このたびあらたに判明した。

家族のなかで武田だけが「大島姓ではないのは、父の師僧である武田芳淳の姓を継いだことによる。武田芳淳は、知恩院事務長を勤めたこともある浄土宗の高僧で、大島泰信に学資を出した恩人であった。独身僧であったため、弟子の泰信との間で、息子を武田姓にする約束があったのである。

さて武田は、誠之小学校、旧制京北中学校、旧制浦和高等学校と進むが、浦和高三年頃から、A（アンチ・ミリタリズム）という反帝反戦グループに加わり左翼運動に足をつつ込む。昭和六年に浦和高を卒業し、東京帝国大学に入学するが、ますます運動に情熱を傾け、授業にはほとんど出ず、「第二無産者新聞」の配布

やビラ刷りに奔走したようである。

そして昭和六年五月三十日、武田十九歳の時であるが、東京大手町の東京中央郵便局へゼネストを呼びかけるビラを撒きに仲間の学生二人が行ったところ、そのうち武田を含む二人が逮捕され、丸ノ内署、本富士署に一カ月間拘留されるという事件が起こる。いわゆる「中央郵便局事件」である。当時の当局側の資料や新聞等を調査したところ、例えば、「特高月報」の昭和六年五月分の号には、武田の名が実名で記載されており、また、「東京朝日新聞」「読売新聞」「国民新聞」「都新聞」の四紙には、仮名ではあるが事件が報道されていたことが判明した。武田はこの事件でかなり精神的打撃を受けたようで、大学の方は自然に足が遠のき、中退してしまうことになる。

武田が左翼運動に参加し、そして挫折していったこの時期は、武田覚さとるという寺に生まれた青年が、自らも僧侶の道を選びとっていった時期に重なる。

武田は昭和六年に得度し、覚から泰淳と改名。昭和八年、二十一歳の時、芝の増上寺（浄土宗の大本山）で加行けぎょうを修め、浄土宗の僧侶となっている。

しかし、武田は、僧侶となったことを非常に屈折した思いで受けとめる。

「異形の者」というのは、人間ではあるが、人間とは一種形を異にするものことです。わたくしはお坊さんになろうとしたときに、自分は異形の者になるのであるとおもった。

〔文学と仏教〕昭和三十八年四月「在家仏教」

武田は、僧侶となることが異形の者となることだと述べているが、増上寺で加行をした時の体験——つ

まり自分の僧侶としての出発点を『異形の者』という題で小説にしている。

すでに俺は俗人ではない、と私は感じた。女を抱き、家庭をつくり、名を挙げ、国力を増進し、この世に於て栄える一般人とはかぎりなくへたたり、もはや、二度とふたたびその仲間入りはできなくなった。今日以後、私は人間でありながら人間以外の何ものかであるらしき、うす気味わるい存在である。

〔異形の者〕昭和二十五年四月「展望」

武田にとって、「坊主であった」という体験は実に恥すべきことであつた。「私の創作体験」昭和二十九年八月『現代文学と創作方法Ⅱ』新評論社）たわけだが、この恥ずかしさというのは、少し異常なくらいである。武田は寺の子に生まれ育つたわけであるから、それが僧侶になつたからといって、なぜそんなに羞恥心をもつのであろうか。

まず最初になやんだのは「お布施」の問題だ。社会主義にかぶれて東大を中退した私には、「働カザル者ハ食ウベカラズ」という説がしみこんでいた。お布施とは一体なんだろう？ 読経がおわつて白紙につつんだモノをいいたくとき、手先がこわばる。（中略）

ところが悲しいことに、私はやはりオフセの中身が気になつた。すべてを棄て去られたからこそ、ブツダは乞食しても恥しくなかつたのだ。ほとんど何一つ棄てようともせず、むしろより多くほしいがつている私には、乞食者となる権利がない。価値あるものを産み出す労働者なら、給金を要求してさしつかえない。だが、私は何を産み出しているのか。

〔私は苦しかった——わが説法——〕昭和四十年五月二日 大阪本社発行「朝日新聞」

と、武田は語っている。また、同様に、

労働者でも農民でも商人でもない自分が、きき目があるのかないのか、死者を極楽・地獄のどちらへと送りどけられるのか、一切不明のまま、白紙に包んだ金銭を受けとり、あまつさえ普通人と同じ色欲をも満喫して、一般家庭よりひろい、樹木も庭も池もある仏閣におさまっているのが、こそばゆかった。

〔わが思索わが風土〕昭和四十六年三月十五日〜十九日「朝日新聞」

と述べている。武田のこれらの発言のなかには、左翼運動の挫折を経験した者の負い目のようなものが、明らかに感じられる。

僧侶は、普通の人の入ることのできない他人の家庭に入ることができる。するとそこで、寺と庶民の生活とのギャップを知る。世俗的欲望を否定するはずの寺は、本来清貧であるべきなのに、まわりの人々の生活とくらべると、すこぶる豊かであった。苦しんでいる人々を救うべきところが、なんら現実的に貧しい人々の救済に役立っていない。むしろ現実の寺は、皮肉なことに、額に汗することなく、楽々と生活している武田は感じたわけではない。そしてその寺の恩恵で、ぬくぬくと暮らしている自分の醜さを思いしらされるのである。つまり、僧侶の生活に矛盾を感じるわけである。

藏経ととじこもりたる冬二階

という句をその頃武田は詠んだという。俗世間と懸け離れた暮らしをしているという意識、そして「二階」という語には、一般民衆の生活との隔絶された距離が象徴されているように思われる。

私には禁欲をしなければ聖職者と言えないという考え方が頭の中にありました。というのは、坊さん

というのはお布施をもらって生活しているわけだが、いったいそれは何によって得たものかという悩みがあるからなんです。(「身心快樂 如入禪定——小説『快樂』について——」昭和四十七年十月「波」)

お布施という収入によって生活を営むことに對する疑問と屈折した思いが武田にはあり、それを打ち消すことができないのは、厳しい戒律を生きることだと武田は感じたのである。性欲がむらがり起る青年僧にとつて、戒律とはすなわち、女人にたいする不犯である。

「とにかく寺住みのあいだは、結婚はしない。それが唯一の決心だった」(「わが思索わが風土」前掲)、「私の性格としては、寺院内で僧として夫婦生活をいとなむことが、どうしても堪えがたかった」(「私は苦しかった——わが説法——」前掲)と、僧侶である間は妻帯しない決意であつたことを、後年、繰り返し述べている。

妻帯の問題は、現代の僧侶でも戒律に素直であれば、誰でも一度はぶつかる問題であるのかもしれないが、武田の場合は特に度が強いように思われる。

この問題は、武田自身が僧侶となる以前から、すでに萌芽していた。つまり、それは、僧侶の子として寺に生まれ育つたということである。

お寺に生まれてお坊さんのこどもであるということとは、やはり、ふつうの人とはちがうように、わたくしはおもつていました。

(「文学と仏教」前掲)

と、僧侶の子という存在の異質性を語っている。また、小説『冷い火焰』(昭和二十四年八月「女性線」)では、出生を自虐嘲笑的に描いている。

父の結婚についても、「父の具合のわるさを、息苦しさを目撃していた」（PRあるいはCM的自伝）昭和三十四年六月「群像」、**「父の悩みを身にしみて知っていた」**（**「わが心の風土」**）昭和四十二年十二月十七日「読売新聞」と述べている。

大島泰信が、自分の妻帯をどう考えていたか、今日、知ることはできない。しかし、息子である武田の目には、父が恥じ、コンプレックスを抱いていたと見えたのである。そして武田は、父のその悩みを、己の悩みとして受けとった。父の悩みと、自分の存在の根源は一つところのものだからである。僧侶の子としてこの世に生を受けたことが矛盾しているという自覚は、自分の存在の根本を恥じ、否定させることになり、さらに、武田が僧侶となった際には、妻帯の問題に対して消極的にさせてしまうことになる。

ところで、僧侶の妻帯について、これほど悩むその精神的背景には、本人の潔癖さ、純粹さがあつたにはちがいないが、もうひとつよほどはつきりした規範があつたのではなからうか。

それは、母方の伯父、渡邊海旭の存在である。『大正新脩大藏経』の監修をしたことで有名な海旭は、律僧として一生不犯の独身生活を全うした。芦川博道氏の『渡邊海旭研究——その思想と行動——』（昭和五十三年三月 大東出版社）、増谷文雄氏の『近代の宗教的生活者』（増谷文雄著作集 12）昭和五十七年八月 角川書店）、海旭の遺稿集である『壺月全集』（昭和八年十二月 壺月全集刊行会）等によつて、海旭のひととなりを探ってみると、独身主義の理由を尋ねられると、「女房をもらう金があつたら、それで学生を養います」と語つたという。自坊の西光寺に女性が宿泊することを厳しく禁じ、一人の妹もその例外ではなかつたという。そして、最期の病床に就いた時も、看護婦を付けることをどうしても許さなかつたという。「結婚は

しない、少くとも寺院の中で生活をしている間は断じてしない」と、自ら語った言葉を終生実行したのである。しかし、他人の結婚にはきわめて寛大で、自らすすんで僧侶の結婚の媒酌をしたという。

武田は、「母の兄は、檀信徒の女性に人気のある美男子、ドイツ留学十年の文章のうまい学者だったが、完全な独身者として一生をおわった」(「わが心の風土」前掲)、「私の伯父Wは、大正新脩大藏経を監修した、有名な学僧であった。彼は、檀家の婦女に人気のある美丈夫であったが、一生、独身で通した。純粹の独身であることが、一そう彼の人気を高めた」(「私の中の地獄」昭和四十六年八月二十二日「読売新聞」と述べており、小説『快樂』においても、檀家の宝屋の主人に同様のことを語らせている。武田の海旭に対する畏敬の念が十分窺えるところである。

さて、明治五年四月二十五日、

#### 自今僧侶肉食妻帯蓄髮等可為勝手事

という太政官布告が出されている。これによって、それまで基本的には妻帯しなかった僧侶が、妻帯を始める過渡期に立たされることになる。明治を生きた僧侶がこの問題で真剣に悩んだであろうことは想像にかたくない。一方は妻帯せず、終生独身を貫いた。また一方は妻帯した。前者は渡邊海旭であり、後者は、武田の父大島泰信であった。武田の非常に身近なところに両者の存在があったわけである。

武田は、「真面目に坊主になろうとすれば、女は抱けないことになる。僕は、この問題さえ解決できれば、一生大藏経ばかり読んでいてもよい、と思った時代もある。」(「作家に聴く」武田泰淳「昭和二十七年十月」文學)と語っている。しかし、結局武田は、僧侶であることと妻帯の問題は解決できず、僧侶の生活を捨て



て、鈴木百合子という女人を選びとったわけである。

武田の「僧籍簿」の記録によると、昭和二十一年四月五日から昭和二十七年七月五日まで、深川にある西光寺の住職を勤め、同時期の昭和二十一年五月二十日から昭和二十七年七月五日までやはり深川の潮江院という寺の兼務住職を勤めている。西光寺は、渡邊海旭が第十六世住職にあつたことで知られる名刹である。海旭歿後は、赤尾光雄こうゆうという海旭の甥、つまり武田の従兄が住職をしていたが、その赤尾光雄が中国で戦病死したために、武田が住職となつたのである。

最近、西光寺から武田の手紙が一通発見された。その手紙は、武田が叔母のかめ——武田の母の妹で、息子の光雄の亡き後、西光寺を守っていた——に宛てたもので、内容は、西光寺の住職を辞めたいというものであつた。「小生は最短期間内に西光寺住職を辞したいと思ひます」「僕は今のところ文学修業以外のことを考へてゐません。何とかして一生のうち少しでも物にしたいのです」「文学々と云つても一旦失敗すればペシヤンコになるかも知れません。ただ現在の心境ではこれはあくまでいつはりのないところですよ」と、僧侶と作家の二足のワラジをはくことが不可能であることを告白し、不転の決意で文学に人生を懸けようとする真情が述べられている。武田の文学に対するじつに誠実で真摯な思いがよくわかる書簡である。

ところで、住職を辞めたい理由として、文学との両立が不可能であることを述べているのであるが、その水面下には、筆者が先に述べてきた僧侶であることの矛盾、苦悩があつたのだろうと思われる。

手紙には日付けが書かれていないので、いつ書かれたもののかはつきりしないが、鈴木百合子と同棲

をはじめするため、寺を出た昭和二十四年頃のものだと考えられる。

なお、職業としての僧侶から離れたといっても、僧籍は亡くなるまで残っていた。ちなみに、浄土宗の僧侶の資格分限をあらわす僧階は、昭和二十二年三月一日に大僧都に、布教師としての階級を示す教階は、昭和十七年四月二日に准輔教になっている。

参考までに、父親の大島泰信は、僧階は正僧正、学階は勸学、伯父の渡邊海旭は、大僧正と勸学を授与されている。

さて、昭和二十四年に寺を離れた後、武田は僧侶であった自分をみつめ、その体験を客観視した作品を書く。昭和二十五年四月には『異形の者』、五月には『迷路』、二十八年十月には『遠くの旗』を発表する。これらは、三部作と称してよい自伝的、僧侶ものの連作である。そして、昭和三十五年一月からは、大作『快樂』を書くにいたる。これらの作品には、社会主義思想や革命、つまり政治と仏教の問題、愛欲と仏教の問題が投げ込まれている。これは、僧侶の実生活のなかで解決できなかった問題を、作品において解決しようとしているように思われる。

例えば『快樂』では、すべての存在、行為、感情が無意味であるがために、もしかしたら仏教では、かえってすべてが全面的に許されていることになりはしないかと、問いかけている。社会主義や革命、混沌とした愛欲の世界をも大きく包み込み、大調和の世界への到達を書こうとしていたのだろうか。現実世界が絶対世界にはかならないとする密教や、徹底した現実肯定の本覚思想のような、宇宙の原理へと統一されていく大きな肯定の世界に向かうように思われる。作品が未完のため、はっきりしたことはわからない

が、その方向性は十分感じ取れる。

さて寺内大吉氏は「泰淳が坊主社会を飛び出したバナネは、あくまでもカイラクへの安住を捨て、ケラクを追究しなかったからであろう。消極的な遁走ではなく、勇氣ある『再出発』だった」(「武田泰淳と『快樂』」昭和五十四年六月『武田泰淳全集 第十七巻』月報17)といみじくも述べている。また、竹中信常氏も「武田氏は寺を出ることによって、本当の意味の『出家』をしたのである」(「いくたびかの出会い——武田泰淳の面影——」昭和五十三年五月「藝術浄土」)と語っている。

愛知の貧農の次男として生まれた大島泰信は、学問がしたいがために僧侶となった。貧しい家に生まれて、博文館の店員をしていた渡邊海旭もやはり学問のために僧侶となった。二人にとって僧侶とは、自分の努力によって勝ち取った「花園」であった。

それに対して武田は、求めるものとしてそれを選ぶ前に、身はすでにそのなかにあった。純粹培養された武田にとっては、寺での生活に疑問と苦悩しか感じることができず、捨て去るものでしかなかった。

寺にいたあいだ、信仰はあたたかく私を包んでくれなかった。それは、針のむしろだった。寺の外で、信仰者にあるまじき行為を積みかさねたあとで、私の傷の上に、信仰らしきものはわずかに、ひそやかに降りかかり、しみとおってきた。

(「わが思索わが風土」前掲)

と、武田は述懐している。

武田は僧侶としての実践的活動を続けることはできなかつたわけだが、その矛盾から作家の道が開け、文学でその矛盾を解決しようとした。

作家武田泰淳が形成されるにあたっては、戦争体験や竹内好を中心とする中国文学研究会との関わりをぬきに考えることはできない。しかし、その根本の一つに、僧侶であったことが深く関わっていたことを本稿で考察した。